

鎌倉戦乱シリーズ（八）

宝治合戦（三浦の乱―三浦一族の滅亡）（中編）

―小競り合い“官騒動”とは―

山崎 宣晴

北条泰時の嫡男北条時氏は、京より鎌倉に下向途中、寛喜二年（1230）二十八歳の若さで病死した。後鳥羽上皇の怨霊のたたりとする説もある。（会報承久の乱参照）。父泰時の死より十二年前に亡くなっている。その時氏が早世したので、泰時の死後、仁治三年（1242）第四代執権を嗣いだのは、時氏の嫡男北条経時（*1）であり、僅か十九歳であった。

時氏の妻安達ノ方は、夫の死後剃髪し甘縄の屋敷に移り、松下禅尼（*2）と称した。この禅尼に養育された時氏の子息経時、時頼（*3）は立派に成長した。だが、祖父泰時の目には、嫡男経時は心許なく感じられていた。比して次男時頼は、泰時のお気に入りであった。鎌倉武士の一端を伺わせる質実剛健、質素儉約を旨とした禅尼の障子の継ぎはぎの話は、貴婦人ぶり

を示す史上に残る挿話としてあまりにも有名である。「物は破れたる所ばかりを修理して用いる事ぞと、若き人（時頼の事）に見習わせて、心つけんためなり」と。

承久の乱後、疫病やら飢饉、地震等庶民は体験するが、二十数年間は戦乱もなく比較的落ち着いた時代であった。その間経時は着々と幕政を整備してきたが、執権就任後、最も手を焼いたのは四代将軍藤原頼経（*4）との問題であった。二歳の三寅が鎌倉に下向して早二十数年、寛元二年（1244）に頼経は二十七歳になっていた。頼経は年を経るに従い幕政のあり方に関心を強め、武家政治の矛盾に気が付き、幕府には邪魔な存在となり、若き執権経時（二十一歳）を悩まし脅かすようになる。

頼経は、北条氏庶家の名越光時（*5）、時章兄弟、三浦氏庶家の

三浦光村(*6)等側近を擁して、北条徳宗家(*7)による執権政治を打倒すべく一大抵抗集団を形成し、その目的は將軍権力の復活とその強化であった。対する執権経時は黙然としていたのではない。その手始めは頼経を廢し、その子頼嗣(よりつぐ *8)を擁立する事であった。寛元二年(1244)四月二十一日、経時が烏帽子親となり、六歳の頼嗣の元服の儀式の時、突然頼経は自分の意思で將軍職を辞し、頼嗣に譲与すると宣言した。陰では経時の内々の脅迫があった事は疑う余地がない。同二十八日には頼嗣征夷大將軍の宣旨を蒙ったのである。そして義兄になるため、翌年七月には妹の檜皮姫(ひわだひめ・十六歳)を七歳の頼嗣に娶らせた。

前將軍(さきのしょうぐん)となった頼経は経時の再三の要請にも拘わらず、その權威を保ったまま自ら「大殿(おおいどの)」と称し、鎌倉から離れようとしなかった。かくして、前將軍派と執権派とが隠然として対立しているさなか、経時夫妻が病気になる。経時室の病状ははかばかしくなく、寛元三年(1245)九月に亡くな

った。享年二十五歳であった。そして今度は半年後の寛元四年(1246)三月経時の病状が悪化、同月二十三日に執権館(経時亭・鎌倉亭・・横大路の南側)で「深秘の御沙汰」(*9)が開かれた。集まったのは、経時と時頼の他誰かは定かではない。この寄合(よりあい)では、経時の二人の息子は幼かったので、経時が執権職を弟の時頼に譲る事で、話が付いたのである。経時の在位は、僅か四年に過ぎなかった。同年四月十九日経時は出家、同年閏四月一日、二十三歳の若さで他界し、佐々目(今の笹目)山麓に葬られた。経時の墓(宝篋印塔)は光明寺裏山にあり、静かに眠っている。その経時の死因については怪しげな風説が乱れ飛んだと言われていた。時頼が權威への野心のため、実兄を殺したのではないかとの囁きである(杉本苑子説)。考えられる仮説と思うが如何でしょうか!

漸くして、二十歳の若き五代時頼執権が誕生した。こうした時頼の強引な遣り口に、名越流北条光時等の強い反発を招き、再び前將軍頼経を奉じて、時頼を討滅せんとする策謀が展開された。

名越光時の時頼追悼の本意は、北条家督争いにあった。名越流こそが北条氏の惣領家(嫡流)と信じていた。その嫡流の根拠は、泰時の生母阿波局(*10)の実家は不明、義時の正室か否かも定かでない。一方朝時(*11)の生母姫ノ前は歴(れつき)とした武蔵の大家族比企朝宗(*12)の娘で義時の正室だった。そして名越館(*13)は、時政―義時―朝時―光時と代々伝領してきている。斯様なわけで、光時は北条一門の嫡流と信じ自負していたのである。

鎌倉市中を駆け巡らす威嚇行動を行う心理作戦に出た。光時他が頼経館に入るのを見届け、幕府軍が館を包囲する。同閏四月二十五日、時頼の厳しい戦う態度に袋のねずみ時頼の敗北は最早明白で、光時は落飾し降伏して出てきた。戦わずして、この騒動は、落着いた。近々に時頼、正村、実時と時頼の伯父安達義景四人による「内々の御沙汰」が時頼館で開かれ、光時は伊豆江間に配流され、頼経は京都に強制送還させられた。この事件は宮騒動・名越氏事件、また寛元ノ乱とも言う。

注記

* 1 北条経時（つねとき・12

24）46）第四代執権。在職

中頼経を追い、その子、頼嗣を擁立す。時氏の長男

* 2 松下禅尼（生没年未詳）

父は安達景盛。経時、時頼等の生母。時氏の妻。障子を切り貼りして時頼に儉約を教えた事で知られる。俗名は安達ノ方。

* 3 北条時頼（1227）63）

第五代執権。時氏の次男。北条氏の得宗専制をほぼ確立す。出家後最明寺殿と称し、諸国を遍歴「鉢の木」で名高いが、史実とは認められない。伝時頼墓の宝篋印塔が明月院にある。

* 4 藤原頼経（よりつね・12

18）56 九条とも）

第四代公家将軍。出家後は「大殿」と称し北条氏に対抗するが破れ、鎌倉追放となり帰洛す。

* 5 北条光時（生没年未詳）

朝時の長男。名越氏の流れ。配流地、江間は三島の南にある。

* 6 三浦光村（）1247）

義村の子で、泰村の弟。名越光時の謀反に参加し、三浦一族の立場を悪くし、宝治合戦で破れ、法華堂で自害する。将軍頼経と

昵懇（じっこん）の間柄の武将であった。

* 7 北条得宗（徳宗とも）

北条一門の嫡流の家督をいう。義時が得宗と別称され、また法名に因むという。北条時宗以後、急速に権力が得宗に集中、家督中心の専制権力が生まれた。また、全国に得宗領を持つ。

* 8 藤原頼嗣（よりつぐ・123

9）56）

第五代将軍。頼経の一男。母は藤原親能の娘。名目上の将軍で、しかも病弱な体質であった。建長四年（1252）将軍職を廃され、京に戻された。没したの⁴は父と同じ年である。

* 9 深秘の御沙汰

得宗の指定で行われる私的秘密会議のことで、後に寄合（衆）と称され、大きな発言力を持つ。沙汰とは是非を論じ、政務を裁断、処理すること。内々の御沙汰も同意。

* 10 阿波の局（）1222

7）源実朝の乳母。阿野全成（ぜんじょう・源頼朝の弟）の妻とも妾とも言われ、北条時政の娘とも推定されている不可解な人物。．．．

真相解明次第お知らせします。

* 1 1 北条朝時（ともとき・1
1 9 3（1 2 4 5）

名越氏の祖。叔母北条政子の官
女を誘い出し、父義時に義絶さ
れた。古くは「難越、なごし」
と呼ばれた険道であった。

* 1 2 比企朝宗（ともむね・生
没年未詳）

比企能員（比企の乱）殿血縁関
係は不明。武蔵国比企郡に本領
を持つ、歴とした在地武士で、
源家譜代の御家人。

* 1 3 名越館（名越亭）

名越山荘、浜の御所、名越殿と
も呼ばれた。源実朝元服の儀も
ここで行われた。名越の地は三
浦半島への要衝。